

最後の一擲

いま生きている言語をみつめる

糟谷啓介インタビュー

聞き手・構成／編集部



社会言語学の基本的態度。三つの言語観

糟谷 社会言語学の観点から善悪について話せという、たいへん難しいご注文なんです(笑)。

—— どうもまことに相すみません(笑)。
糟谷 社会言語学の方向づけをそもそも僕がちゃんと理解してるかどうかからないんだけど、この分野で善悪っていうと、ちょっと先走った感じがするんですよね。むしろ「価値付け」ぐらいでとどめておきた

いんだけでも、前提としてまず確認しておきたいのは、どんな学問でも、何らかの対象を観察して記述するという行為がベースになっていて、学者なら必ず何がしかの観察文を書くだろうということ、そして、対象が言語であれ社会であれ、どんな観察を記述した文でも、理論負荷性と言いますが、理論がなければ書けないということです。このことは科学哲学でも随分前から言われてることですが、何をどんなに客観的に書こうと思っても、それを規定している概

念とか、判断の形式などは理論がないと成り立たないはずで、例えば五十五〇十だつて、十進法っていう前提がないと言えませんがよ。

—— おっしゃる通りです。

糟谷 理論のない純粹な観察文はありえない。ただそうなると、結局学問は命題の集合であるとするれば、一番基礎の部分にユークリッド幾何学の公理みたいな、証明できないけどそれを前提にして始める命題があるはずで、それが食い違ふと全体がおそらく全く違うものになる。自然科学の場合だとそこが食い違っても互いに矛盾がなければいいんですが、人文・社会科学の場合、そのところにすでに社会や人間に関する価値付けの命題が入っちゃうので、その学問を外から見ると、これは色がついてるか、イデオロギー的だとかいうことになる。ユークリッド幾何学から見てリーマン幾何学はイデオロギー的だとかは、普通は言わないと思うんですよ（笑）。

—— あんまり聞かないですね（笑）。

糟谷 だけど社会科学の場合だとそれがありません。それは別に悪いことじゃないと

思いますけど、ただ、こちらの方方に立つ人が、別の見方で成り立っている学問体系を見るとイデオロギー的に見えるということがお互いに生じることで、根本的に価値相対的になっちゃうんですよ。

—— 確かに。

糟谷 ある研究者によれば、言語に対する見方がだいたい三つぐらいに分かれていて、一つが一番伝統的な、人文的言語観。古典的言語観と言ったほうがいいのかな、これは文化というか文献学と結びついて、言語にある種の序列を認める。文化的に高位にある、学ぶべき言語と、それほど価値のない言語と。文献学ははっきりそうとは言わないでしょうけど、暗黙の前提として序列を設けている。

—— ギリシャ語・ラテン語を頂点とした言語とエラルキーですね。

糟谷 そうですね。この古典的言語観に対して出てきたのが言語学の見方で、これは言語を自然科学の対象として見る。価値判断なしで全てを平等に見て、生物学者が生物を分析するように記述を進める。さらにこれに対して三番目に出てきたのが社会言

語学だと言われています。これは言語を、言語自体として見るのでもなく、言語に価値づけするのでもなく、社会的なコンテクストの中で見る見方です。どれも根本命題が違ふから、三者お互いにお互いがイデオロギー的に見えるんですよ。

—— なるほど。

糟谷 どれからどれを見ても、何か偏っているように見える。善悪を言う以前に、そのレベルの問題がまずあるでしょうね。僕は自身はこの三つの言語観はどれも間違っているとは思わず、そもそも言語全部をひとつの視点で判断するのは無理なんで、非常にヌエ的な見方だけど、三者合わせて見るしかないと思うんですよ。ただ、社会言語学の見方がわりあい重要だと思ふのは、社会言語学は、言語そのものの存在よりも、その言語を話す話者集団の存在の方をむしろ重視する点ですね。また別の研究者が言うには、言語の伝播 language spread なんでもありません、言語が広がるというのは人間集団の力関係、あるいは力が広がる、あるいはその集団自体が広がるのであって、空中に言語が存在して延べ広がって

いるわけではないというんですね。そういう見方を社会言語学は非常に強く持つけれど、その一方で、言語を全て社会的な条件には還元できないでしょう。言語構造の問題は別に社会と関係ないですから。

—— 構造というのはシンタクスとかのことですか？

糟谷 そう、音韻論、形態論、統辞論の三つで、それを研究するときに社会的な要因や政治状況は関係ないと思う、ただし研究对象を設定する時に、例えばなぜ標準語だけを対象とするのか、あるいはなぜこの方言を対象とするのかという、そこで社会的要因が関わってくる局面はあって、その局面で、何らかの価値判断がどうしても出てくると思いますけどね。日本語文法にしても、文法の分析方法自体には社会学的な観点は必要ないと思うけど、もひとつ上の階梯で見たときには、それが必要になってくる。標準語文法なのになぜそれを日本語文法っていうのか。言語学の大きな見方として、日本語ってのは方言の集合だって見方がありますから、標準語も関西方言も方言でその全ての集合が日本語だとすると、日

本語文法ってどういうことなんだと、そこでもう社会言語学の範疇になるわけです。

構造主義にはいい面も悪い面もあって、言語から人間集団も切り離したし、言語の指示する実体も切っちゃったし、抽象的な構造だけにしちゃった、それで成果もあったけれども弊害もあった、それを修正するために社会言語学が出てきたというところがあるんですね。そういう、反動をもたらしたという意味では、社会言語学の興隆の一番の功労者はチョムスキーだと言ってもいい(笑)。

—— なるほど、その、社会言語学とチョムスキー的言語学の対比は、言ってみればパロールとラングで、相対的にパロールを重視するのと、ラングを重視するのがせめぎ合いながらやってきた——

糟谷 ケンカしながらやってきた(笑)。
—— (笑) ケンカしながらやってきたものとして、とてもすっきり把握できるんですね。第一の、人文的言語観についても少し。

糟谷 一九世紀に自然科学的な言語学が登場してきたときに、仮敵として文献学を

利用した面があるんですけど、実際は、それまでは文献学者＝言語学者というのがかなり一般的だったんです。グリムにしろ、みんなそうですよ、特にヨーロッパは。文献学と訳されるけれども philology はもともと言語研究で、ただし伝統的なフィロロジーとしての言語研究はやっぱり、言語

のために言語を研究するというよりは、ホメロスを理解するためにギリシャ語を研究するとか、ヴェルギリウスを理解するためにラテン語を探究するとか、そういうのが基本姿勢なんだけれども、そういう「ため」が、言語学にはないんですね。ギリシャ語自体のためにギリシャ語を研究するっていう、そんなことありえるのかなって僕なんか思うんだけど(笑)、でも——

—— すごいポリグロットな言語学者に、わりとそういう傾向がある人が。

糟谷 いますよね。
—— 格の数が半端じゃなかったり、すばらしく極端な活用をする言語を好きこのんで選んで——

糟谷 その活用をみて興奮するとかね(笑)、いるんですよ、そういう人。言語学

者ってえてしてそういう人が多いから、こっちはそういう人を見ると偏った人だなあと思うし、そういう人から見たら、文献学や社会言語学がひどく偏ってるように見える。そういうもんですよね。ただそういう人が極端な活用に目を輝かせたとしても、彼が言語学者であるならば、そこで動詞の活用に美的価値を見出して興奮してるわけじゃないはずで。

—— あ、そうか。

糟谷 そのあたりは自然科学的言語観も社会言語学的なそれも共通するところがあるんですが、言語学からすると、例えば日本語研究に際しては、源氏物語も壁の落書きも言語資料の価値としては同じだって、そういう言い切っちゃう。文体の独自性とか、ある時間をかけて練り上げられた表現とか、あるいはまたそういうものを重要視してきた読書や文化の背景、あるいはまたそれらの欠如、文献学ないし人文学なら大事にするだろうそういうものは、言語学や社会言語学は、おそらく意図的に無視します。日本語の歴史を書くときに、文学作品をひとつも使わないでも書けるというのがおそら

く言語学の理念で、源氏物語にせよ言語学が扱う場合は美的なもののは切り捨てて、その当時の言語を還元するための資料としてみる。そこは文献学と言語学の一番大きな違いだと思いますね、表現として見るかどうかという話。もっとも、文学を使わないで言語史をと言ったけど、例えばイタリヤ語なんて、標準語は書き言葉しかなくて話し言葉は全部方言だから文学なしでイタリヤ語史は書けないし、文学語というカテゴリを作ったほうが早いような言語もあって、言語によって事情が違うんですけどね。アメリカとヨーロッパでも言語学の方向性はかなり違ってて、アメリカでは言語学が出てきたときに、先住民の言語を分析しなきゃならなかった。フィールドワークにいて、ヨーロッパの言語とぜんぜん違う言語に向き合わざるをえない状況で育まれた言語観というのがあると思います。ヨーロッパにはまだ伝統的な文献学の伝統が生きてて、それが良い意味で社会言語学に反映してる時がありますね。

言語多様性は「よい」ものなのか

—— 言語的人権について

糟谷 言語というのは独自の認知システムであるという考え方があって、これはチョムスキーは否定してるんですけど（笑）、この考え方が、最近よく言われるようになってきた、言語多様性を維持すべしという主張のひとつの根拠になっています。一つの言語が失われることは、この世の中に一つしかないシステムがなくなってしまうことなので、それはよくないことだという判断。こういう判断は、言いかえればつまり、言語の種類が多い方がいいのは、言語はそもそも多様な存在なのだから、少なくともというのは言語の本性に反するってことに他ならない、ということなんですけど、こういう見方をすると、じゃあなんでそもそも言語が減っていったりするのかわかるのか、その点に関する洞察が弱くなる場合があるんですね。社会言語学なんて色々だから一言ではくれないけど、言語多様性が言語の本来あるべき姿だと必ずしもみなしているわけではありません。言語がたくさんあるというの



エスノログのサイト。
(<http://www.ethnologue.com/>)

話者の多い順に並べていて。

糟谷 はいはい。

—— 一番最後に、マン島のマンクス・ゲ
ーリック語というのが。

糟谷 もう死んじゃった言語ね。

—— そこに「ロシア語から始めた見取り
図を今我々の目の前で絶滅してしまったマ
ン島のゲーリック語をもって終わらねばな
らない」と書かれてるんです。言語が絶滅
するっていうイメージを初めてみたのが多
分これだったんですよ。

糟谷 言語が絶滅するときは、だんだん話
者数が減っていった、ついに最後の話者が
一人だけ残る。そういう状況が必ず訪れる
はずなんですけど、これは感情的な言い方
なるけど、その時の話し手の孤独感は何
となく感じますね、自分しかこの
言葉が話せない、自分の言葉を話す人がこ
の世の中に自分しかいないっていう状態は
ね。やっぱりそういう想いを人間にさせて
はいけないと思いますね。

—— 前に池澤夏樹だったか、南アメリカ
の南端のフエゴ島の方、マゼランが通るの
にさんざん苦労したあたりの島に、ある言

語の話し手がたった一人の女性だけになっ
てしまったという話を新聞のコラムに書い
てましたね。

糟谷 そういう状態っていうのは、我々み
たいなメジャーな言語を話してる人間には
想像つかないですよ。そこに対する配慮
が必要だという思いが、たぶん社会言語学
の中にはあると思うんです。話者が減るの
はどういうときかという、火山の噴火で
住民が全滅したみたいなのは普通はなくて、
何かの事情で世代間での伝授ができなくな
るとき、つまり親の言語と子供の言語が違
ってしまおうときですけど、そうなるのは言
語以外の力が働いているからだというのが
社会言語学の見方です。ある種の政治的な
抑圧とか社会的なあるいは経済的な力がそ
こにはあると。さっき言ったように、言語
が言語集団と遊離して存在することはあり
えないし、言語が次世代に継承されないの
は自然な流れじゃない、言語が広がったり
勢力が縮小したりするのは、水が流れたり
満ち引きするような自然現象ではなくて、
社会的な現象だとみなすわけです。それで、
それが果たしてその話者にとっていいこと

は単に一つの事実なので。

—— 少なくとも何千オーダーであるよう
ですね。

糟谷 こういう時によく使うエスノログ
っていうウェブサイトがあって、これによ
ると今は約七千。少し前は四千とか五千と
言われてて、数えかたにもよりますが、
多いことは確かです。なぜそんなに多いん
だっていう問題もあるけど、それが最近減
りつつあると言われはじめたのが二、三十
年前かな。

—— この岩波新書の『現代ヨーロッパの
言語』というの、僕も昔読んだんですけど、

なのが悪いことなのか。例えば、まあ一番典型的なのは法律でその言語の使用を禁じるケース。これはむしろ日本でもアイヌとか沖縄に対して、また植民地に対してやったことだし、トルコなんかもやっていますよ、クルド語にね、今は少しよくなったかな、前に国会でクルド語使って投獄された議員がいましたけど。トルコは絶対そんなことやっていないって言うんですけどね、いや別に僕トルコ嫌いじゃないですけどね。

—— ありゃ(笑)。

糟谷 最近だんだんわかってきたのは、オーストラリアやアメリカの先住民に対する言語政策です。子供を勝手に連れ出しちゃうんですよ、親にはこうするといよいよ言っていてサインさせて、これはKidnappingじゃない、契約だっていうんだけど、親はその契約なるものの内実を全然理解してない。英語で育てないとこの子がダメになるって、子供を修道院とか教会の寄宿舎に入れて英語だけで教育するんです。するとその子は先住民語が全く話せなくなる。そういうことが行われていたというのが二十年前くらい前からオーストラリアではかなり

わかってきて、強制的にやったことなんて裁判になって政府は負けましたね。カナダでもやられてたし。これが一番極端な場合で、そういうこともあって言語の転換が起きる、それはやっぱりよくないだろうというのには誰がみてもあると思うんです。もう一つは、大言語——勢力の大きな言語が近くで話されるようになった時に、この言語を学ばないと子供が不利になるといって、これは親が率先して、その言語の話される学校に通わせる。これはよくある話で、中国辺境でも今そうなっています。チベットやウィグルには中国語は思ったほど広まってないんですけど、就職のときには中国語ができないと極めて不利なので、だんだん中国語の学校に行く生徒が増えてきちゃって。民族語の学校もあるけど、高等教育までない場合があって、それだったら最初から中国語のってね。そういう局面に関して議論されているのは、国家は——って言うていいのかな——ある選択肢を示すべきだということですね。基本にあるのは、ある特定の言語を話すことで社会的な不平等をこうむることは許されないという、これは

よく憲法なんかにある人権条項といえますか、宗教や信条その他で差別してはならないという、そこに言語も入れるという主張ですな、つまり基本的人権の中に、言語の継承ということも入れるべきだということ。もちろん移民に行った場合とか、それが通用しない場合もありますけど、同じ土地にずっといて親も一緒に住んでのに言語が切り替わってしまうのは、選択権が与えられてないからで、つまりは人権侵害だということ発想ができてきて、「言語的人権」という言いが今はよく使われるようになりました。ただ、法律の専門家によると、この概念は法的に成り立つかどうかちょっと難しいですけど。

—— というと？

糟谷 法的な概念として成立するには、言語的人権を事由にした裁判を起こせないといけないですから。この概念に基づいて誰が誰に対してどうという裁判を起こせるか、どういう判決を下せるのか、そのあたりがまだ非常に曖昧ですからね。でも、だとしても、少なくともある種のレトリックとして、人権の中には言語も含まれるとは考

えられるでしょう。ただここで難しいのは、言語って本人が選べないんですよ。

—— 親の言語を子が選ぶことはできないですからね。

糟谷 自己決定に基づいて自らの意志で母語を選ぶ人はいない。もっとも、その議論を進めると、ハイデガーみたいな、言語が人間を決めるんだとか、人間を通して言語が語るんだとか、言語が運命共同体を作るとか、ドイツのヴァイスゲルバーって人がそんな感じで、それもちょっと言い過ぎかなって感じになっちゃいますけどね。ただ、言語の中にある種の人権的要素も見る見方、それが社会言語学で今よく言われるようになってきています。言語がなくなるのがよくないんじゃないかと、ある特定の言語を話すことで、話し手が社会的な不平等、不公正にさらされることを是正すべきだっていうことですね。言語的多様性を守れるというときに、社会言語学は、多様性そのものよりもそちらの面を強調する。逆によく日本でも最近あちこちで多文化とか多言語共生とかいう言葉がいうようになったのが、あれはむしろ非常に欺瞞的に見えると思う

人もいます。日本では現実には、強弱いろんな言語がありながらも何ととっても日本語が圧倒的に強いわけですから、それを見ないで単に多言語共生とか多文化共生とか言っても、そんなのは流行のお題目に過ぎないというのむしろ、社会言語学の方から出ている批判です。

—— そうなんですか。

糟谷 だから今の社会言語学では、言語多様性が善だとか、疑いない真理だとかいうふうには別になつてないと、個人的には思の著作によれば、さっき言ったように言語というのには言語のためにあるんじゃないかと、その言語を話す人の集団とともにあるんだから、例えば、ある少数言語の勢力がものすごく小さくなってコミュニティの維持もできなくなつて、生活上何より深刻な問題—— 失業や低所得、一番悲惨なのはエイズや麻薬、そういう問題に苦しんでいる時に、その共同体の人たちに向かって、みなさん自分の言語を守りましょうなんて言っても、およそトンチンカンな話だ。そういうことはもう後でいいと思う。自分の言語を話

そうがどうしようが、ある種の幸福追求の権利を成り立たせる現実的な基盤がないときに、多言語を守れって言われてもね。政府のパンフレットや何かで多言語共生とかうたっているのを見ても、どうも逆にうさくさく見えますよ。

—— 純然とお題目としてはどうなんでしょう？

糟谷 まあね、日本の場合、昔はそんなこと一切言われてなかったわけだから、そういう意味では、お題目を唱えるだけでも少しは良くなったんだとも言えますね。ただ、このお題目の裏には移民政策とかいろんな現実的な政策があるのでね、若年労働者が少なくなつて移民入れなきゃいけないとか、これも賛成反対いろいろあるわけだけど、一応政府としては入れて、労働力を保持する方針でしょう。でも景気が悪くなれば最初に切られるのはやっぱり外国人労働者だし、また問題なのは、移民受け入れに際して日系という概念を入れちゃつてるんですね。日系はビザの種類が違うんですけど、別の枠で入れるんだ。難民条約を批准したときにいろんな法律を変えなきゃならなく



てそうしたんですけど、そういうかなりた
いへんな移民の問題やら何やらが山積みの
その全体の中で、多文化共生、多言語共生
というのが一つのモットーとして使われて
いるわけで、単なる安全弁として使って
るにすぎないという批判も多いです。完全
悪いとは思えませんけど、ほんとに今現実
がどうなってるのかを見えなくするために
その言葉が使われてるなら、やっぱりあま
り良くないんじゃないかなと思いますね。
別にそんな言葉、使わなくてもいいと思

ますけどね、多言語共生だなんて。

—— 実際問題として、いろんな種類のモ
ノリンガルな人が単に同居しているだけで
は、共生といったってどうにもなりません
しね。ドイツでは非常にシステマティク
に移民にドイツ語を教える制度を、しかも
安価に設定して、その代りビザ更新のため
には一定レベルまで到達しなさい、とい
うことにしてみました。

【糟谷】 最近と言語能力をビザの更新とか入
国時の基準にすることが多くなりましたね。
これは世界的な傾向で、移民の取り締まり
のある種の口実にされてる面があって、つ
まり、来ないで下さいとは言にくいから、
試験をやりますという。試験をやれば、だ
いたい人は来られなくなっちゃいますか
らね。留意する必要があるのは、ドイツの
ようなそういう施策の根本にあるのが、
「ホスト国の言語をすでに話す移民だけを
受け入れるということであってはいけな
い」、ということですよ。例えば日本に移民
が来るときに彼らが「日本語を話していな
ければいけない」かっていえばそんなこと
は言えないでしょう、逆に、現状では、日

本語を話さなかったらその人たちにとって
たいへん不利益なんですよ。だからむし
ろ国連かILOかどこかに、「外国から移民
労働者が来た時にホスト国の言語を学習す
る機会を奪ってはならない」という規定が
あるはずですよ。学ぶ権利を保持すべきだ
ということですね。ただし、学ぶにあたっ
て最初はゼロからでもいいとするか、ある
程度の基礎があらかじめできてなきゃい
けないか、その議論はあると思いますけど
ね。

——そこは結局経済的な議論とくっつ
いて、コストの問題になるんですよ。

【糟谷】 そうなっちゃいますよね。だからそ
この話は、ここでは措いときましようよ
(笑)。

言語的正義。神は全ての言語で語りかける

【糟谷】 理念の話をも少し続けると、さっき、
言語学では全ての言語は平等だと言いま
したよね。これもひとつの理念で、現実の施
策に反映するのはやっぱりなかなか無理
がある。全ての言語を文字化して教科書作
るのは無理だけど、一応理想としては掲げ

ておいて、実際どこまでできるかな、という、そういう発想にしかないね。移民にして、民族別の人口は全然違いますからね、コミュニティで住んでる人はいいけども、散らばって住んでる人はどうするかとか、これは難しい。移民とは別に先住民の問題もあって、その議論は別にすべきだという人もいるし。英語でエスニックマイノリティといえは移民のことで、ナショナルマイノリティが先住民、ドイツで言えばソルブとか、フランスで言えばブルターニュとか。

—— もともとその地に住んで、別の共同体に属す人たちですね。

糟谷 うん。その二つは区別すべきだっていう議論があるけど、厳密に考えるとわかんなくなっちゃうんで、実際には区別しなくていいと考える人もいます。それに、どんなに多数言語でもホスト国に来たら少数言語になりますしね。ドイツ語の母語話者でも日本に来たらマイノリティ言語になっちゃう。

—— 確かにそうですね。

糟谷 その場合でも、もとは大言語話者だ

から放つといいたいだろうとはいかないと思う。後はもうケースバイケースで判断していくしかないと思うんですけど、一応理念上のこととして言えば、言語というのは多数であることが常態であって、減るのはつまり言語以外の要素があるからである、だからその要素をできるだけ緩和しよう、あるいは取り除こう、という三段階の議論だと思えますね。この二番目の段階に、それは良くないことだという価値判断がつくことがあるわけです、政治的社会的な力が介入してるから良くないというふうに。逆に言えば、そのところを、別にそれでもないじゃないかっていう議論はありうるんですね。

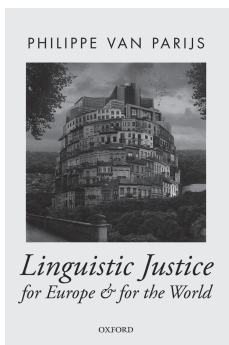
—— ある言語話者が減ってしまうこと自体は仕方がないという議論？

糟谷 そう、この世は弱肉強食で、今までそうやって人間の歴史は作られてきたんだから、今とり立ててマイノリティを保護する必要はないという議論はあります。けどそんなこと言ったら人権だってそうですね。昔はみんなそんな概念なしでやってきた、それがなぜ今は守られるようになって

たかっていうと、やっぱりある価値の発見があったからでしょう。だからそこに僕はあんまり大声じゃ言えないけど、ある種の進歩っていうのは認めてもいいんじゃないかとは思う。

—— 大声で言ったって別によくないですか(笑)？ その価値の発見についても少し。

糟谷 例えば、人間が人間に、死によって罪をあがなわせることは本来あるべきじゃないという議論は昔はおそらくなかったですね。でも今ではこれは問題になって、日本にはまだ死刑があるけど、EUには死刑認めてる国は入れない。それがおかしいという意見もあるかもしれないけど、やっぱりそれはある種の認識の進歩、発見があったんじゃないかと思う。コロンブスが新大陸を「発見」して先住民を絶滅させてとか、ああいうことは今ではもうなくなったというか、できないと思えますね。でも昔はそれが普通にやられてたし、誰も悪いとは思わなかったっていうのはね、今から見るとほんとに不思議だと思う、なんであんな凄いことやっただらうかってね。アフリ



Philippe Van Parijs
『ヨーロッパと世界の言語的正義』
オックスフォード大学出版局、
2011年。

かから人いっぱい連れてきて奴隷にして、なんてのもね。でもその時は誰もなんともし思わなかったんでしょう。それを、やっぱりおかしいと思うようになったというのは、ひとつの発見ですよ。それで社会言語学の分野でいうと、少数言語が減びていくのはやっぱりおかしいというのが、ある発見だったと思う。もともと素地はあったにしてもね。

言語的人権という話をさっきしましたけど、これも最近、言語的正義 linguistic justice というのが出てきてます。ただ justice を正義と訳すとなんかね。日本語の正義っていうのは、正義の味方月光仮面みたいなね——今は誰にも通じないでしょうね(笑)。

—— 昭和生まれだなんて思うだけですな(笑)。そもそも正義の味方というチーム自体が通じにくくなってるんじゃないかな。糟谷 その本まだ詳しく読んでないんだけど、言語の justice というこの概念、発見

は言語的人権と似てるんですけど、正義に関しては例のジョン・ロールズからとって、あれ面白いのは、この世の中、社会が正義を成り立たせるには一人ひとりが善人になる必要はないってところですよ。極端な場合は個々人が悪人でエゴイズムの塊であっても、ある社会のルールを使えば公平な資源の配分はできるっていう。それを援用して言語的正義と言うからには、やはり、諸言語間でのいろんなリソースの公平な配分、例えば教育とか、公的機関での使

用とかね、そういう主張の一環なんですな。—— もともと justice という言葉自体が、公平ないし公正さ、であって善とは関係ないですもんね。

糟谷 そう、だから justice の理念は公的空間での言語使用に関して重要なキーワードにもなります。問題なのは私的な部分をどうするかで。まあ、フランス式に、そのへんは各自勝手にやりなさい国家は面倒見ませんよ、という態度もありうるんだけど、そもそもどこから公的でどこから私的なのか、簡単には切れない。その点、一番きっぱり公私の区別の問題を取り上げるのはフェミニズムで、つまり、家庭は私的で国家は公なんてのは嘘だ、家庭にだって公的な面があるとかね。事実、どこまでが公でどこまでが私かというのを非常に区別しにくい社会になってきたとは思います。昔、おカミとシモジモが綺麗に分かれてたときはね、シモジモはシモジモで勝手にやってくる空間がそれなりにあっただろうと思うんだけど、今はほとんど社会の隅々に至るまで国家が浸透して——国家って別に支配の側面だけを言うんじゃない、保険なんかだ

って日本の場合には国家がやってるし——私的空間と言っても、それほど自由な空間なんて実はもうないんじゃないか。単純に、私的な空間ではレッセ・フェールでやって、

公的空間では利害調整をして、それで済むというわけにはいかなくなっちゃってると思う、今の世の中は。家庭内の言語使用といっても、人は家の中で暮らしてるわけじゃなくて、会社行ったり学校行ったりして、そこでの言語使用を持ち帰ってくるから、家庭の言語にそれがフィードバックされたりね。そうすると家庭内の言語さえ、好きにしたいいよでは済ませられないですよ。ね。

—— そうですねえ、〇〇語の人が××語の土地へ移民して子供が生まれて、学校はオール××語だけで家庭ではオール〇〇語で育てていいからねって言われても、そうしちやダメと言われるよりは断然いいにしても、具体的には何かと困難でしょうね。
糟谷 そう、だから最近では、家庭言語管理 family language management という概念もあって。外と違う言語を話す家の場合はある程度、その家の中のマネジメントも

必要になってきますから。こういう時にはこういう言語を使うっていうセルフ・マネジメント。

—— セルフなんですか、自分たちでやる？ 親がですか。

糟谷 そうです、例えばね。放ったらかしにしといたら強い勢力がどんどん入り込んでくるので、まあ難しいですけども例えば子供に対して親の言語を定期的に教えるとかね、もう少し厳格な場合は、家の中では子供にはその言語しか使わせないとか、そういうのがありえます。むしろ公的な権力がそこに介入することはできないので、いろんなアドバイザーが必要になってくるんですが。

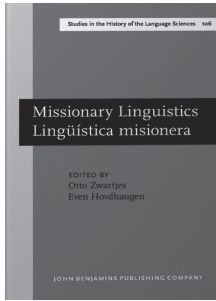
—— ただし、極めて少数になってしまった話者集団から、公権力での支援を要請してくれば別？

糟谷 ええ、そこは個別ケースによって違ってきます。だけどそういう要請が来るのはやっぱり、過去に公権力による抑圧された歴史があった場合に、それを是正してくれという形で出てくるケースだと思ふ。

—— 特段に政治的抑圧などが働いたわけ

でもないのに、ほんとうに自然に、ある言語が徐々に衰退の過程をたどる、というようになことはありうるんでしょうか。

糟谷 うーん、ほんとうに自然にというのがどういうことか——それはやはり歴史的文脈を全く考えないのは難しいと思いますよ。特に少なくともヨーロッパは、フランス革命以降どこでも国家が意図的な言語政策を始めちゃったので、知らないうちに自然に何かの言語が広まってたとかなくなってたとかいうことは、まづなくなってる。昔はあったんでしょけどそれは。アラム語なんかがほぼ消滅したのは自然だと、もの本には書かれていますね。そもそも純粋に自然にというのがありうるのかどうかはともかくとして、ある言語が広まることは、おそらく必ずしも権力の介入によるわけじゃない。大体、国家ってそんなに強くなかったと思います、近代以前は。むしろ例えばヨーロッパでは、地域言語の分布はカトリックの教区に沿っていることが多い。宗教は影響力強いですから。カトリックの教区と国家の領土が二重になってた状態がずっと続いて、国家に完全に一元化



O. Zwartjes / E. Hovdhaugen 編『伝道の言語学』
J. Benjamins, 2004年。

されたのがフランス革命以後ですかね。

—— 一方で宗教者というか布教者は、コミュニケーション意欲がすごく高いから、自ずから言語政策に率先して手を染めるところもありますよね。

糟谷 うん、でもほら、イタリアの小説によく出てくる、ラテン語の読めない神父さんとか(笑)。

—— でも昔の言語学者っていうと、カトリシアンが多かったような気がするんですが。

糟谷 いや、プロテスタントがむしろ強いですよ、言語学は。例のウィクリフ協会、伝道で世界中の言語に聖書を翻訳しようとした、あれもプロテスタントの団体ですしね。プロテスタントの方が強いと思うな。

「言語学夏期講座」 Summer Institute of Linguistics という有名なのがあって、これ別にあの、夏に講座を開くわけじゃなくて、そういう名前の団体なんですけどね、世界中に宣教師兼言語学者を派遣して、その言語を記述して、ついでに伝道・改宗させる活動を今でもやってる。

—— へええ。言語に対してある種のフィードバックを使命とする感じなんですかね。糟谷 ミッションナリー・リンググイステイクスなんていう概念も最近あって。一六世紀以降のヨーロッパは、宣教師を世界中に

いっぱい送ってきたけど、文法とか辞書とかもうすごい情熱ですよねあれ。たいへんな影響力を持ったので、その研究をする人が増えてきています。もとはバカにされてたんだけど、所詮は素人だらなんて言っても例えばベトナム語の正書法、アルファベットのを宣教師がまず作ったので、やはりすごい、それは。それまでベトナム人は自分の言葉を音声文字にしようなんて考えてなかったんですから。

—— 言語話者としてのある種の自覚、自意識みたいなものを持たせる役割ですね。

一方でそういう役割と目的意識によって、言語学自体が甚だしく促進されるという。

糟谷 それはあるでしょうね。そもそも、さっき最初に言語観を三つ挙げたけど、プロテスタント的な言語観というのを入れてもいいかもしれない。

—— プロテスタント的な言語観って？

糟谷 つまり、神は全ての言語で信徒に語りかけているという。

—— あ、そうか、カトリックはそこはあんまり考えなくていいわけだ。聖職者が媒介するから。

糟谷 そう、そう(笑)、適当なラテン語でいい。聖職者以外は聖書読まなくていいしね別にね。

—— そっか。なんかイエズス会のイメージがあるから、カトリックがすごく頑張ってるという活動を展開してた気がしてたけど。糟谷 イエズス会は、カトリックの中でもかなり独特ですよ。ヨーロッパではね、Hierarchyの分布をみると、圧倒的にプロテスタント地域の方が高いんですよ。やっぱり自分で聖書を読まなきゃいけないからね。カトリックは自分で読まなくても、教会に



ミサに行つて神父さんの声で説教を聞いてとか、もっぱらオーラルな媒介で成り立ってたから。

——そこへいくとプロテスタントでは神の言葉を、わけのわからない呪文みたいな言葉じゃなくて、それぞれの日常の言葉で理解しないといけない。

糟谷 しかも文字を通してね。

——そうですね、言われてみればプロテスタントの方が、教義的には頑張らないといけないわけですね。

糟谷 でも本来はね、バイブルだってクル

アーンだって、声出して読んで、それを聞くもんなんですよ。だから、オーラルな世界だったら言語の標準化なんていうのは——文体の統一くらいはありうるにしても——全面的な言語レジスターの統一なんてありえない。カトリックみたいに、礼拝の時はラテン語聞いといて日常生活では全く別な言語を話してというのは、オーラルな世界ではごく普通で、そのいろんなレジスターの中から、やがて特権化されたレジスターが出てくる、それが書き言葉として出てきたのが、近代の意味じゃないかと思えますね。

——なるほど。

糟谷 話し言葉がごちゃごちゃあって、その中で自然に標準語ができてきたというプロセスではなくて、まず書き言葉がそうやって出てきて、それでその書き言葉に合わせてみんな話そうよというのが、ある時点で教育の目標になっちゃったんじゃないか。これもある種の近代的な言語観の発現と言えるんじゃないかな。

方言と公用語論

——東京方言を話す人は明治の初め頃まではごく少数だったわけですよ。それを標準語化するに際して、ものすごく人為的に他の諸方言を抑圧していった。そういう話も、同様な図式で考えていいのでしょうか。

糟谷 たぶん、区別しなきゃいけないと思うんですよ。そもそも方言と言語はどう違うかという問題もありますけど、日本語の場合、方言話者に対する時と、やっぱりアイヌや沖縄に対する時とはね。ある本を読んだらフランスもすぐくて、百年前までみんな方言、パトワって言いますが、それを話してたのが、今ほとんど話せなくなっちゃった。たった百年ですすよ。他の国にあんまり類例がないので、あまりにフランスは速いんじゃないかと言われてる。フランスのこの標準語化の施策は一九世紀後半、義務教育体制が敷かれてから一気に行われたんですけど、それと並ぶくらいのスピードで日本語も標準化したんですね。まあこれは抑圧だけでは説明できないと思

ますけどね、おそらく。

—— フランスは、糟谷さんがお書きになっていた言語ジャコバン主義の時期からというわけではないんですね。

糟谷 あの時ほとんど実行されてないですね。やろうとはしたけど、言語統一の一番の手段は学校制度なので、義務教育制度ができないと実際は無理だし、学校ができても、それですぐ統一できるかということこれも怪しい。日本でもそのあたりに関する調査を、戦後に確か国立国語研究所が方言地域でやったんだけど、小学校でいくら教えても、卒業したら結局みんな忘れちゃうって。

—— そんなもんなんですかね。

糟谷 うん、みんなそんなに上級学校じゃないし。だからむしろ、ラジオ・テレビ、マスコミの力が大きいんじゃないかという。イタリアでも似たような本が出てますけど、学校だけでは限度があるんですよ。しかも完全に義務教育ではない場合、何キロ離れてたら行かなくていいとか、冬になったら子どもを働かせる学校に行かせないとか、いくらでもありますからね。それも

周りの社会的環境次第で、学校出たらもう全然別の世界、自分たちの世界へ戻っちゃうわけ、方言の世界に。日本の場合、そこもコミで一緒に標準語化されていった。ただ、明治期ですからね、ラジオだって大正からでしょう、ラジオ以前はどうだったんだろうなっていう疑問はあるんですが。

—— まあでも、八〇年代あたりにはまだ、九州の南の方とか東北の北の方とかへ行くと、ほとんどわからない言葉喋ってましたよね、とくに年配の人々は。

糟谷 僕もね、親父がね七高出身でね、鹿児島のあるとこので連れていかれて、タクシーに乗ったら、そのタクシーの運転手と親父が交す会話の言葉が一言もわからなくてびっくりしましたよ。千葉県の館山の方言だって、ぜんぜんわからないね。日本は、方言差が割合あったと考えていいんじゃないでしょうかね。

—— 細長くて山が多いですからね。

糟谷 うん、ただ柳田國男の説によるとね、せっかく常民が自ら標準化しようとしているのに、国がむちゃな政策を植えつけて押

しつけるから失敗するんだって、彼は標準化自体には反対してないんですね。その地方地方で、例えば東北だったら仙台とか、北陸だったら金沢とかで、ある言語的な標準化が自然と進んでいたという説です。山奥から仙台へ出てきて方言なんか話したら笑いのにされるじゃないかと、で、そこで笑う、笑われる、その笑いが教育力だということですよ。みんなに笑われることで教育されるという。

—— うーん(笑)。確かに、親世代でもあったみたいですね。山口県東部と広島市の微妙な違いで笑われるとか。

糟谷 人間ってのは面白いもんで、ちょっとした些細な違いに反応するんだね。福島でもそうですよ、郡山とかの中通りと会津はかなり違うから、お互いに、あそこは違うとか何とか言いあってね。で何かの拍子にその地域の言語的中心部というかな、都会へ出ると、方言矯正されて、それをまた故郷に持ち帰る、そんなふうにして話し言葉はそれなりに自然にやっついていけばいいんだって、あとは書き言葉での標準化さえ進めばいいんだと柳田は言うんだけど、明

治の教育政策は話し言葉のほうでも徹底的にやろうとしたんですよね。方言音の矯正とか。東北で言ったらアイウエオの五つの母音をきちんと区別しろとかね。その背景には、ある種の言語学における音声中心主義があって、最初はそんな厳しくなかったんだけど、途中からやけに強制的になった。

——それは例の、軍隊で命令がよく聞きとれなかったとかいう問題とは別なんですか。

糟谷 単純にそれだけじゃない感じがしますね。単に通じなくて不便だったからじゃないって、国の言葉はこうあるべきだという強いイデオロギーが上の方にはあったんだらうと思うけど、そのへんは専門家に訊かないと。

——方言札を首から下げられるなんて典型的に話し言葉の世界の話ですね。

糟谷 そうですね。何もあんなことしなくとも、書き言葉だけ立派に書ければいいということにしとけば、方言話者だって納得して、頑張って書いたと思いますけどね(笑)。別に柳田に与するわけじゃないけど、ただこれほどこの研究でも言われてるけど、

少数言語——ここは方言も同じですけど——の話者が、自分の言葉が恥ずかしいという感覚を持ってしまいうことが、何より問題だと思いますね。

——「○○しとる」と「○○しちよる」程度の差で笑われるというのは、相当に強いですよね。関東からみたらどこが違うんだという微妙な差なんだけど。埼玉だったら浦和あたりの人間に川越や越谷の人間が田舎者呼ばわりされるとか(笑)。

糟谷 それは言語だけの問題じゃないですよ。その土地は、人間はこういうもんだっていうステレオタイプ。

——それもあるし、やっぱりその地方それぞれを中心地があるんですよ。

糟谷 柳田はそれはむしろ是認しているわけだけど、でも笑われるほうとしては結構たまったもんじゃないですよ。言葉はそうそう取り替えられないから。

——知り合いの九州大学の先生によれば、九州のタクシーの運転手は、若いときに東京なり大阪なりに出ようとして、でもどうにも言葉の壁が乗り越えられなくて、帰ってきて運転手になってる人が多いんだそう

で、それだけ九州弁というのは重たいんですよ、という話でした。柳田も姫路の近郊の出身だから、なんらかの努力というかがんばって克服したところがあるんでしょうけど。

糟谷 むしろやり過ぎるぐらいやったかもしれない(笑)。そういうことを考えるにつけても、自分の言葉に対する引け目、言葉の不利を取り除くべきであるというのが、言語的多様性を維持する方向性の基本というか、第一にある考えだろうと思えます。多様性そのものはむしろ二の次で。

——全国どこでもその気になれば標準語が通じるようになった今では、逆に方言もいいもんだっていう話になってますね。

糟谷 失われやすいですからね、方言は。日本語母語話者が英語を習ったからといってそうそう日本語を忘れないけど、方言は——まあでもスイッチングやってる人はいますね、方言の場合も。

——東京にいて完璧な東京弁を話しても、地元に戻れば自然に方言が出るということが多い気が。

糟谷 そうですね。そうすると、引け目か

ら方言を話さなくなったりする段階、あるいはそれは良くないからどうかしようという段階がまずあって、そこを一定クリアすると現状のような、コードスイッチングで上手く話し言葉を切り替えてやればいいという段階がくる、と仮にするとね、次の段階に何がくるかというところ、大阪弁を第二標準語にしようとか(笑)。それは昔あった冗談だけど――

――今の大阪市長が国政に進出してきたら、そんなこと言うんじゃないかと思っただ時期もありましたけどね(笑)。

糟谷(笑) まあだから、要するに、第三段階としては、その言葉を公的な場面でも使わせろっていう主張をすらかどうかということが問題になるので、方言の場合はなかなかそうはならないと思うけど、違う言語の場合、それは出てくるケースがわりとある。ただし、その話者集団の総意というよりも一部の指導者や言語学者が突出して主張してるだけで、何もそこまでしなくてもいいんじゃないのというようなケースもままありますけどね。

――「英語第二公用化論」というのがあ

りましたよね。あれ最近はどうなってるんでしょうか。

糟谷 日本の場合には、朝鮮語の問題とかアイヌ語の問題とかを別とすれば、言語問題が政治化するということがあんまりないんですけど、珍しくはっきり出てきたのがそれでしたね。これも議論自体はもう自然消滅しちゃいましたけど。日本には実は今、法的には公用語規定はないんですよ。日本国憲法にもないし、あるのは裁判で使用する言語の規定かな、確かそれぐらいしかなくて、厳密には公用語規定がない。第一公用語さえないのになんで第二が先に出るんだっていうのが一時話題にされました(笑)。公用語のありかたはほんとと国によって違うんですよ。アメリカも連邦レベルでは規定されてないんですよ。州憲法にはあるけど、連邦憲法で英語公用語というのはいちよと論争のタネになりすぎる。昔いちど大統領選挙のときに出たんですよ、あのクリントンと戦った、ドールかな、あの頃の共和党のアジェンダの一つに出た。連邦憲法に英語を公用語に入れるか入れないかということで、クリントンは、ヒスパニ

ックの問題があるから入れないと。共和党の方はバックでU.S.イングリッシュというロビー団体が活動してたんですけど、これは、アメリカの連邦憲法に英語公用語規定を入れるのが最終目標の団体なんです、ちょっと移民規制もしてね。その初代会長って日系人なんですけどね(笑)。

――ほう(笑)。

糟谷 ハヤカワっていうね、一般意味論をやった人。カリフォルニア州上院議員で。

――あの言語学の本を書いているハヤカワさんですか。わりとよく見た本ですよ。糟谷 そういう団体があって、アメリカにやる不法移民を排除しようっていうのの環境で、アメリカ人は英語が使えなければいけないと憲法に書き込もうというのが共和

米国国勢調査員は米国の全住民に、国勢調査への参加を呼びかけています。
「2010年国勢調査に参加しましょう。」

2010年国勢調査は、2000年国勢調査以来、初めて、国勢調査員が、戸別訪問して、世帯の全住民に、国勢調査の参加を呼びかけています。これは、国勢調査員が、世帯を訪れて、世帯の全住民に、国勢調査の参加を呼びかけている初めての調査です。

国勢調査は、国勢調査員が、世帯を訪れて、世帯の全住民に、国勢調査の参加を呼びかけています。これは、国勢調査員が、世帯を訪れて、世帯の全住民に、国勢調査の参加を呼びかけている初めての調査です。

国勢調査は、国勢調査員が、世帯を訪れて、世帯の全住民に、国勢調査の参加を呼びかけています。これは、国勢調査員が、世帯を訪れて、世帯の全住民に、国勢調査の参加を呼びかけている初めての調査です。

米国2010年国勢調査のパンフレット日本語版。

党側で。それでクリントンが勝ったので、それ以降はこの問題は大統領選で出てないんじゃないかな。ビスパニック票が離れちゃうから。

——なるほど。

糟谷 アメリカの国勢調査票って、授業でよく使うけど面白いですよ。中に二つだけ言語に関する問題があって、「家で何語を使いますか？」というのと「英語はどの程度話せますか？」で、後者の回答は *Home* というのがすごく多い(笑)。

——はー(笑)。

糟谷 それに、アメリカの国勢調査票は何十カ国語かのヴァージョンがあって、日本語もあるんですよ、アラビア語も。質問票自体が、英語では読めない人がいるから——なるほど。

糟谷 その点すごいと思いますよ、やっぱりアメリカは。その二つの質問だけでも、かなりのことがわかるんです。それでビスパニックはその *not at all* の率がすごく高くて、つまり英語のできない人が多いんだけども、でもそれはつまり逆に言えば、英語ができなくても暮らせるってことなんで

すよね、コミュニティがあるから。だから授業でそれ言って、皆さん安心して下さいって言うんだけど(笑)。できなくてもコミュニティさえあれば暮らせますって。実際、英語がなんでこんなのにしてきたかという疑問は確かにあって、九〇年代くらいからグローバルゼーションでアメリカ化と一緒に英語がどんどん広まってきて、実際に少数言語にとつての抑圧になってる地域もあるとは思ってますよ、アフリカとかね、でも日本の場合そんなこともなくてもうちょっとと能天気な感じ、それでいてなんでもんなに英語にブランド力がついちっちゃったか——のはね。英語が話せないとなんか人間として(笑)——

——恥ずかしいみたいなの。さっきの仙台の話じゃないけど、英語がうまく話せないと笑われるという。これから大いにそうなっていくかもしれないね。

糟谷 ヨーロッパでも英語学校の宣伝が増えてきた気がします。

新しい価値。シンクロニシティ。
相対主義を超えていく

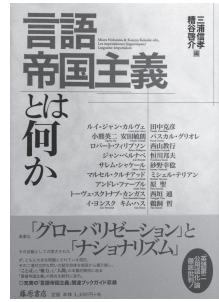
——言語学上の新しい価値の発見というあたりのお話をもう少しお話を聞いてほしいです。

糟谷 いろんなきっかけがありますが、大きく言えば、ひとつは一九世紀のナショナリズムです。特に東ヨーロッパのポーランドやチェコのあたりで、言語と民族の組合せで独立性が主張されましたよね。それを皮切りにユダヤ人のイスラエル建国の動きなんかも高まる。シオニズムって一九世紀ナショナリズムのある純粋形だと思ってるんですよ。ナショナリズムと言語が結びついて、民族は大小に関わりなく固有の価値観と固有の言語を持つるんだとね。もう一つの大きなきっかけは、二〇世紀になってまた別の文脈でヨーロッパで出てきた地域主義の運動で、フランスだったらブルターニュとかコルシカとか、南仏とかね、一番強かったのがスペインのカタルーニャ。以前から実は国があったところが、国民国家に同化されちゃったという意識が強くなってき

て、もともとの国を取り戻そうという、この運動はかつては、いわゆる右左に分けるなら右翼の発想だったんですよ、二〇世紀途中ごろまでは。フランスならアキシオン・フランセーズや、カトリックや地域の伝統と結びついて出てきた主張だった。フランスでもよく問題にされてるけど、アルザスのいわゆる民族運動、あれもだから歴に傷を持っていて、ナチスと協力した面があるんですよね。ナチスもいろいろ事情をわかって、かなり少数言語に肩入れする姿勢で、ドイツがきたら君たち独立させてあげるよって言ってやってたんです。民族言語の独立というのは元はそういう、非常に伝統的な保守の考えだったんだけど、第二次世界大戦後になるとむしろ左翼と結びついた形になって、かなり違ってきた。国民国家批判みたいな形で転換してね、ヨーロッパでも、アジア、アフリカのナショナリズムももちろん。ただアフリカでは、言語の問題は最終的にはあんまり前景化しなかったですね。みんながスワヒリ語を公用語にしたわけじゃないし。だから国や地域によってだいぶ違う。あとは先住民の言語

運動という、これはかなり最近の形です。この間報道されてた、ほら、来日したマオリの女性が刺青をしたのでも——
—— ああ、ありましたね、温泉に入れてくれなかったって話。
糟谷 あの人も言語運動家というから、たぶんニュージーランドのマオリ語の教育者だと思っんですよ。マオリは先住民の言語運動がわりあい上手だったとこで、ニュージーランドの公用語にもなって、さすがに平等とはいかないけどかなり地位の上昇があつて。それにならった形で世界各地で運動が始まっているのは確かです。それはもう、だから言語学とは違うレベルですけどね。彼らも別に言語学のことを考えて運動してるわけじゃなくて、むしろ自分たちの、はっきり言えば生きるためですよ。やっぱり自分の言語を使いたいとか、伝えたいとか、それは自然な欲求ではあるし、支配側でもちょっと今まではやりすぎだったんじゃないかというある種の反省が出てきて、姿勢がやや軟化したのと、運動がちょうどうまく合致したのが二〇世紀の後半じゃないかと思えますね。その結果、小さな集団

の言語でも存在価値をきちんと認めていくという方向が現実として出てきたわけですね。言語学的な、危機言語の救済とか言語多様性の維持という理念はそれを後追いつたんだと思う。理念が先にあって運動が出てきたわけじゃないんです。ただ、その出てきた時期が面白くて、ほんとに、みんないっせいで出てくるんです、世界中で、ある時期に。なんだかシンクロしたみたいですね。
—— 言語多様性ということが言われるようになったのとはほぼ期を一にして、生物多様性ということも言われるようになったでしょう。そんなところにもシンクロニシティがあるように思います。アジェージュも確かシュライヒャーなんかを引きつつ、生命系と言語系を類比的に語ったりしてると思うんですけど、この類比は実際、どのくらい有効なんでしょうね。
糟谷 そうですね、生物多様性との比較が一番違うのは、さっきからの話とも関わるけど、言語はそれを話す人、集団がいる、で、その人たちが言語を守りたい、守ってほしいと言うという、そこが生物とは違う



三浦信孝、糟谷啓介編
『言語帝国主義とは何か』
藤原書店、2000年

んですね。トキがボクのこと守ってとは言わないから、そこが根本的に違うと思うんですよ。自分たちの言語を守りたいという人はおそらく他の言語、言語一般のことを言ってるんじゃないかと、今話してる私たちのこの言語と、それを話してる私たちのことをなんとか援助してほしいと言っているわけで、それを上からまとめた時に、言語多様性っていう言葉が初めて出てくる、その根っここのところの現実を無視してそのチームだけ切り離すのはむしろ僕は危ないんじゃないかと思うし、だから言わなくてもいいと思う、言語多様性って。そのあたりが、たぶん生物多様性の議論とは根本的に異なるところじゃないでしょうか。

ただ、ひとつ面白い観点はね、なぜ言語多様性を守らなければいけないかというこ

とに関する一番ラディカルな意見として、生物多様性と言語多様性は因果関係にある、というのがあるんです。因果関係というか、生物多様性があるって言語多様性があるって、両方を減ぼす原因がある、すなわち産業社会。この本（『言語帝国主義とは何か』）の中のトウヴェ・ストックナブ・カンガスって人がそう言うんですけど、例えばニューギニアは今でも言語が多いし生物も多様だけど、ヨーロッパは言語種も少ないし生物種も少ない、これは単純に対応してるんじゃないかと因果関係だというんです。また一方で、このまあいと地球が減びるからなんとかしなきゃいけない、そのためにはエコロジカルな環境を整えることが必要で、そうすると生物多様性や言語多様性はそのエコロジカルな世界を成り立たせる必須の要因である、という視点も、あることとはある、それはちょっと僕、言いすぎかなと思うけど、でもやっぱり原発のことやなんかもあって、ある種のエコロジカルな視点というのをどうしても我々はもう身に着けてしまったからね。別に言語多様性じゃなくてもいいんだけど、いろいろ、本当

にこのままでいいのかわからないという疑問は確かに感じますよね。で、産業社会というところで言うと、言語種を減らすにはどうするかっていうと、学校を作るよりもまず道を通すことなんだよね。昔から、道を通して通行を容易にすれば、いろんなところから人がやってくる。その方が強力なんです、学校よりも。だから今中国が盛んに地方に高速道路を作ってますけど――

――言語政策なんだあれば。

糟谷 大きく見れば、そういうところはあろうと思うんです。どんなに役所が奮闘して、あしろこうしろ言うよりも、道路を作って物資の運搬を頻繁にして、モノや人の流通を活発にすれば、どうしたって言語はだんだん同一化してきますよね。道を通すというのはメタファーで、現代ではネットが同じ役目を果たすかもしれないですね。

―― 鉄道を通すのは帝国主義の一つのきわめて基本的な戦略だったというのと同じですね。

糟谷 マルクスは鉄道、一応肯定してるんですよね（笑）。いや肯定じゃない、あの人

ブな面がそのままポジティブに転換する。だからインドの植民地支配も、マルクスにしてみれば古い共同体を壊すという非常にポジティブな面を持っていて(笑)、だって資本主義によって人間が自由になった、自分の労働力を売る自由を手に入れたというわけだから。それはそうなんですけどね、隷属させられる自由ではあるけれど。

—— マルクス主義者はどうですか、マルクス主義者で言語学に関わった人がけっこう多い気がするんですが。

糟谷 さあ、どうだろう。
—— スターリン言語学のイメージが強すぎるのかな(笑)。

糟谷 スターリンは言語学だけではなくて、全てにわたって通曉なさってた(笑)。

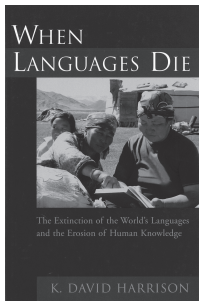
—— グラムシも確か言語学出身でしたね。
糟谷 ああグラムシはそうですね。グラムシは特別ですよ、サルデーニャの出で、もともとバイリンガルでね。でもマルクス主義は言語に対しては大体において鈍感ですね。スターリンは、あれ書いたの別人だっけもう分かってるしね(笑)。マルクス主義は実は非常に帝国主義的な発想

で、大民族中心主義。小さい民族は大きな民族に融合すべきだっていう。そう、それに対する反省もあつたんだな——結局マルクス主義というのは、ある種の統一文明圏を作ろうというわけだから、小さい民族の文化とか言語とか言ってもしょうがないという方向はあつたと思うんです。ところが、ソ連を作った時にそれじゃうまくいかないんで、民族自決権を入れたんですよ、ローザ・ルクセンブルクは反対したけど。その二本線がマルクス主義にはあつて、大民族中心主義と民族自決権、二番目の方は、現実にソ連や中国を作った時に少数民族のことを無視したらできないんで、一応建前として入れてあるんだけど、本音は同化主義ですよ。中国はやっぱりそうだと思いますよ。そして、ある産業化の一環として

考えれば、ものすごい近代主義。だから、思想的には、社会主義はエコロジーともうまくいかなかったんです。マルクス主義側から考えれば、自然はやはり人間に与えられた財でしかなく、それは徹底的に利用すべきなんだけれど、エコロジーからするとそうじゃない、環境にそれ自体の存在価値を認めてから。そうするとマルクス主義側は、お前らブルジョワジーと結託してるってエコロジーを批判したりしてましたよね。

—— エコロジーがブルジョワ的というのは、どういう意味で？

糟谷 まあつまり階級矛盾を隠蔽してるというんですよ(笑)。でもエコロジーといえば、さっきの生物多様性の問題ね、もうひとつ別の観点もあると思うんです。生物多様性が語られるときは大抵、地球が生まれた時からの長いスパンで語られますよね、地球はいつでも多様な生物の棲み家だった、だからこれからも、って。でも、歴史っていうカテゴリーの中で考えると、一回あったことは二度は起こらないし、違う場面で起こったことは社会的な意味が違う。千年



K. D. Harrison 『言語が死ぬとき』オックスフォード大学出版局。2008年。

前の生物多様性と、現在の生物多様性は、意味が違う——社会的にね。だから生物多様性を考えるにしても社会学的立場で考える場合は、やっぱりどこそこ、例えば近代に起こったこととか、二〇世紀で何が起ったかとか、そういう限定が必要なんじゃないかと思えますね。例えば宇宙科学とかであればね、それこそ地球や太陽系が生まれる前からのタイムスパンでものを考えるんでしょけれどもね、数千万年前からベテルギウスが膨張してるとかそういう(笑)、でも社会科学としては、もうちょっとタイムスパンを短く——今の若い人から見ると短くもないのかな(笑)——五百年くらいでとってみれば、そこで起こってきたことはそれまでとは違うんだってことがはっきりするはずだから。

—— 学術分野を分ける基準というものが、まさにどれくらい歴史的なスパンで物を見る場所に視点を限定するか、にあるのかもありませんね。

糟谷 あ、それはあるでしょうね。してみるとやっぱり分野間の相互介入は必要ですな、どうしてよ。

—— 相互の介入があって初めて全体がならされるといふか、それこそ学術多様性じゃないですけどね、いろんなスパンで切り取る方法と、切り取ったものが提示されることによって、むしろ初めて客観的になるというか。ひとつかふたつしかなかったなら、お互いにイデオロギー的偏向だとけなしあって終わるのかもしれないが、いっぱいそれがあればね、偏向しているというよりは役割分担であるということがハッキリするのかな。

糟谷 そういうことはあるでしょうね。だけれどやっぱり——僕は社会学者だから言うんだけど——ほんとに実存的に考えると、その人はその場にしか生きてないんだからよく昔のマルクス主義で「革命は百年後に来る」とか言って、じゃあ今生きてる人はどうするんだという議論と同じでね。今そこにいる人がなすべき判断の役に立たないのって、学問的なものの抱える根本的な問題ですよ。例えば近くに原発作るなんてときも、科学的なデータだけ示されたって素人には何もわかんないですから、そうするとそういう学問的なデータ自体がある種

の圧力になって、有無を言わせぬ形、つまりおまえら素人だから黙ってろっていう形になっちゃうかもしれないし。

—— まあね。

糟谷 でもこれもたぶん両面あって、学問がほんとに、いろいろな社会問題に対して実践的な処方箋を与えるようになったら、これもまたちょっと危ないことでしょうね。何が「いい」のか「悪い」のかという問いにしても。

—— うーん。もうね、その善悪というテーマ自体、かなり解体してるんですよ。

糟谷 うん、善悪ってカテゴリーが、もう成り立たなくなっちゃって。

—— そうなんです。善悪なんていう極度に抽象的なレベルで語ろうとする限りは、それこそもう相対主義しか選び取りようがない気がしてしまっただけ。

糟谷 うん、でも相対主義というのも、さっき言ったのとは別の方面からも僕ちょっと疑問に思ってますね。あらゆる価値が並存していて、いろんなものが平等だという見方は、俯瞰しないと獲得できないから、基本的に上から目線の見方ですよ。完全

な相対主義なんてものは本当にありえないんじゃないかと。

——あるいは、自分が実際に関わる局面と、相対主義を語る局面とを、語りにおいて完全に切り離さない限りですな。

糟谷 そうそう。

—— 切り離して語るのであれば、何に就いてだっていつでも自在に相対主義的に語れてしまう。

糟谷 言い訳に使う相対主義とかね。人権なんてものはヨーロッパの概念でわれわれには別の考え方がある、とか。自分のことを正当化するときに相対主義を導入する、するとそれは普遍とか真理とかの否定につながる。そういう使い方は最初はやっぱリネーション、民族が主体化されたときに出してきたので、これはナショナリズムのある一つの側面ではある、それが縮小再生産され続けているようなところもありますね。

—— 相対主義の最大の弱点は、実地に使えないってことですよね。いくつもの真理が並存可能とか、真理はなくて全ての価値が平等とか、概念としてはいくらでも言えますけど、じゃあその相対主義的な考

えに基いて実際に世の中どんなことをしていこうかっていうと、少なくとも直接には応用不可能な。

糟谷 オブローモフ主義者になって一日寝てるとかね(笑)。

—— 結局なにか行動するときはどれかを選ばなきゃいけない。

糟谷 逆に言うとね、その、何か選ばなきゃいけないその場面がどういう場面であるかというのをとことん反省すればいいんだよね。リフレクティヴって最近流行ってるけど、リフレクティヴ・ソシオロジーとか。

—— 矢澤修次郎さんがそうでしたね。

糟谷 ブルデューなんかもそうで、社会学がいったい何をやるうとしていいのかを、社会学は自分で、それ自体を社会学として追求しなきゃいけないと。ブルデューは僕わりと好きなんだけど、「客観化を客観化する」ってよく言うんですよ。客観化してようでも、それは一体何をやっているのか、もう一回はつきりさせる、それは確かにやってもいいと思うんですけど、ほとんどの学者はそれやらないね。

—— それは人文科学でも同じことのように

思われますね。

糟谷 それやって幸福になるかどうかは別問題ですけどね(笑)。そうして反省を繰り返していったって、ある根本的な命題まで還元したらね、絶対これは両立しないっていう局面まで問題を突き詰められるはずだと思っただよ。そこまで行った時に、じゃあどうするかっていうのは、そこでまた出てくると思うけど。両立するか、それをさらにもう一段、高次に高めるか。あとは——僕なんかそこに近いけど——場合によって使い分けるっていう(笑)。

—— それはもう高みに行き過ぎて地面に逆戻りして下り立ってる境地ですね。

糟谷 最後はサイコロですね、うん。

—— サイコロで? (笑)

糟谷 賭ける。投金とかいって(笑)。

(二〇一三年九月一三日)